

平成30年度
SGH事業の成果検証事業【速報】

継続すべき点・変更すべき点

第2版(2018年7月25日)

筑波大学SGH研究班代表研究者 永井裕久



University of Tsukuba



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

筑波大学SGH事業検証研究班メンバー・事業協力者

<調査設計>

永井裕久(筑波大学ビジネス科学研究科教授・附属学校教育局特命補佐)

椿 広計(統計センター理事長・筑波大学名誉教授)

Benton, F. Caroline(筑波大学ビジネス科学研究科教授・国際担当副学長)

濱本 悟志(筑波大学附属学校教育局教授・次長)

木野 泰伸(筑波大学ビジネス科学研究科准教授)

川崎 将男(株式会社アルゴ専務取締役)

朱 藝(筑波大学ビジネス科学研究科助教)

<海外連携校調査・インタビュー調査協力研究者>

平井孝志(筑波大学ビジネス科学研究科教授・国際経営プロフェッショナル専攻長)

Magnier-Watanabe, Remy(筑波大学ビジネス科学研究科准教授)

Deseatnicov, Ivan(筑波大学ビジネス科学研究科准教授)

Tan, S.L. Caroline(筑波大学ビジネス科学研究科准教授)

Maswana, Jean-Claude(筑波大学ビジネス科学研究科准教授)

顧 俊堅(筑波大学ビジネス科学研究科助教)

<インタビュー調査協力外部研究者>

高橋 潔(立命館大学心理学部教授)

義村 敦子(成蹊大学経済学部教授)

鈴木美枝子(いわき短期大学幼児教育科教授)

小澤伊久美(国際基督教大学教養学部講師)

<分析協力>

黒木弘司(筑波大学非常勤職員)

<調査事務局>

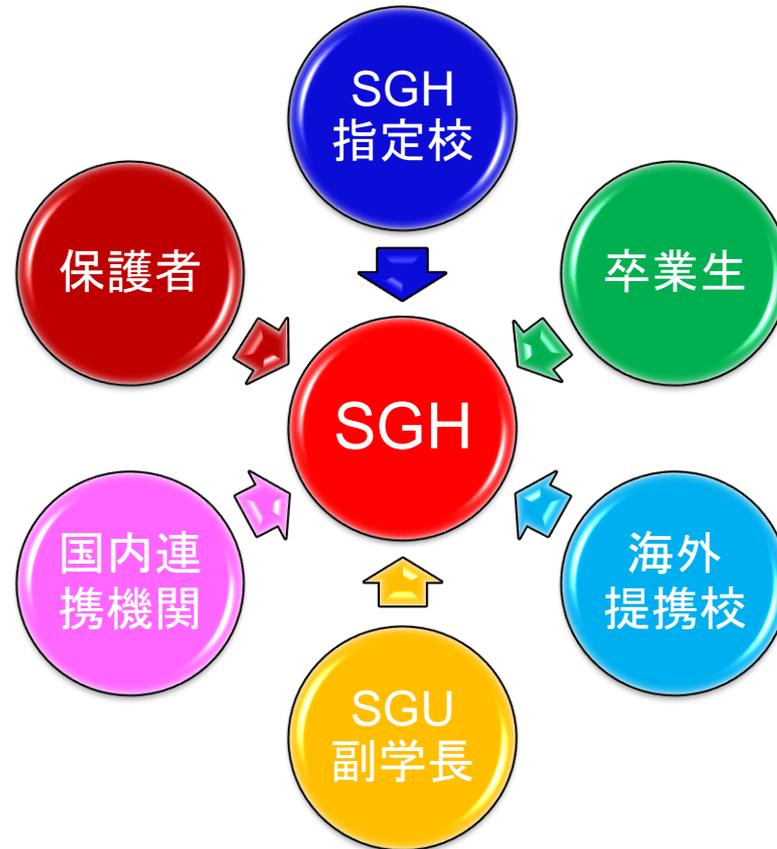
増尾はづき(筑波大学海外交流アドバイザー)

産官学5大学の研究者
18名が参加した
プロジェクトチーム

本検証事業の目的

5年間のSGHプログラムの事業成果を調査研究し、エビデンスにもとづき今後の事業発展に向けて「**継続すべき点**(変えてはならないこと)」と、「**変更すべき点**(変えなければならないこと)」を探る。

検証アプローチ

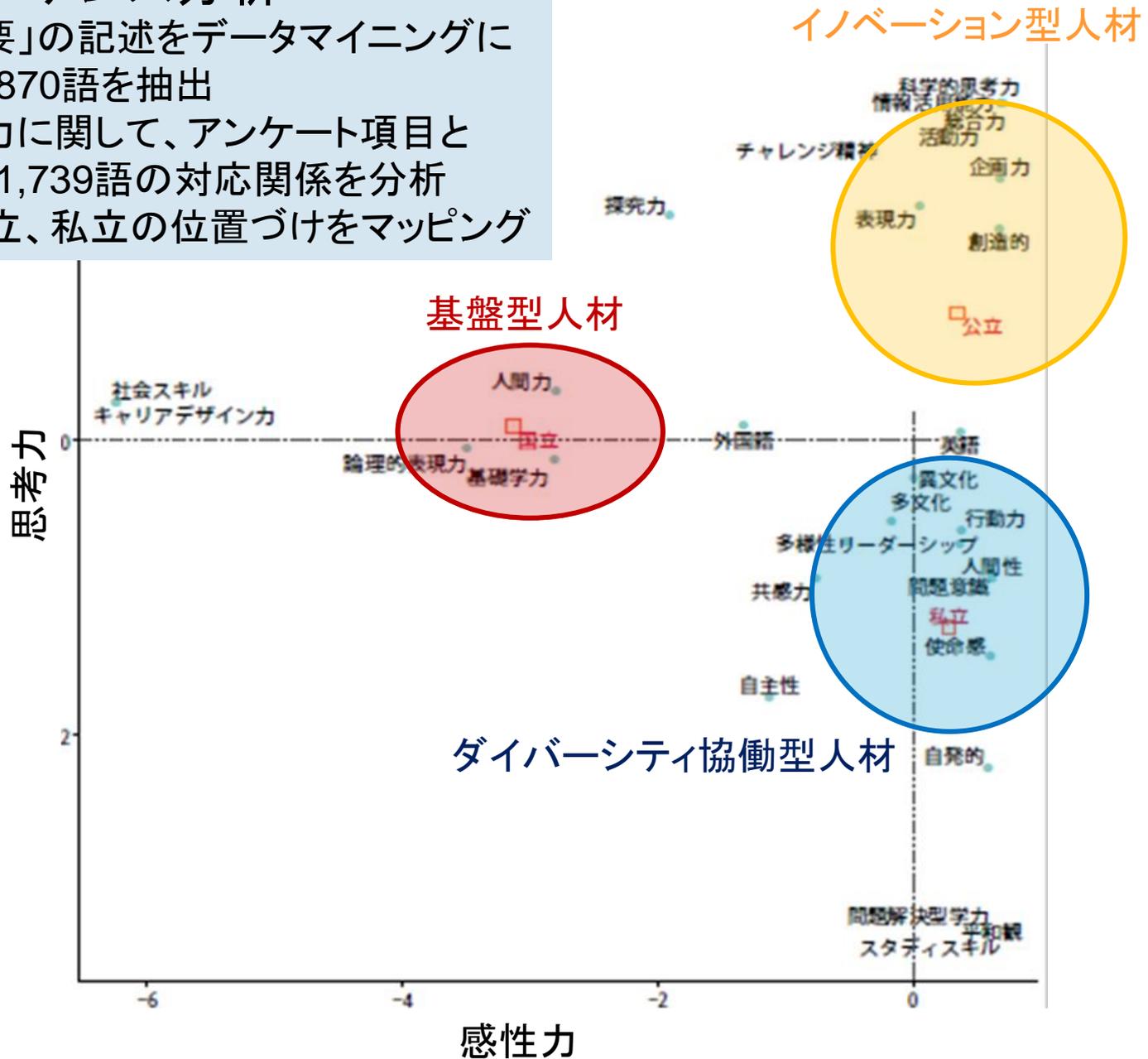


- 6者のステークホルダーによる360度評価
- 定量調査・定性調査の相互補完による統合的検証
- 多面観察（指定校、卒業生、保護者）によるグローバルコンピテンシー・マインドセット・PPDACの客観的評価

書面調査結果 ハイライト

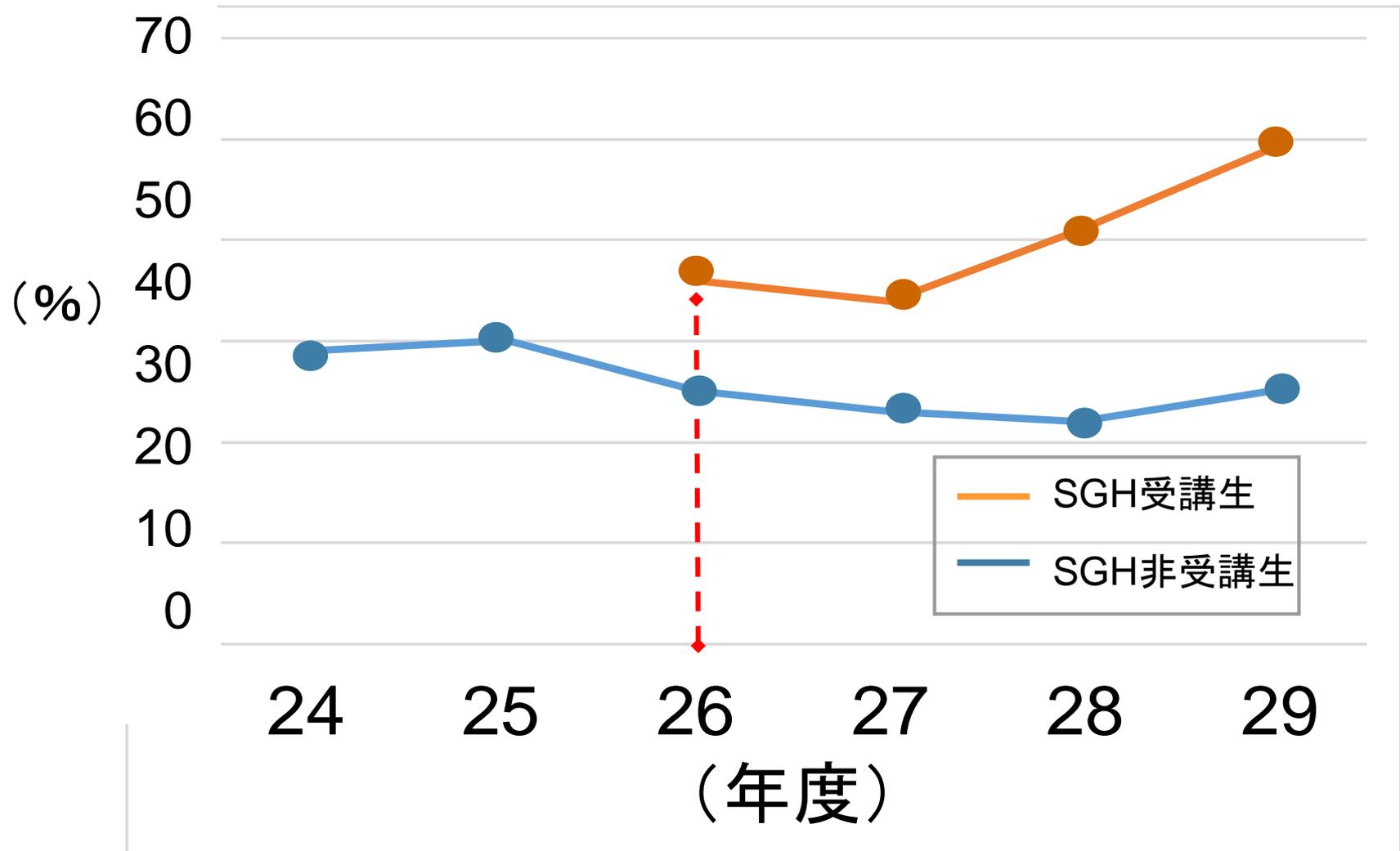
コレスポネンダンス分析

- * 「構想概要」の記述をデータマイニングにかけ、64,870語を抽出
- * 資質・能力に関して、アンケート項目と整合する1,739語の対応関係を分析
- * 国立、公立、私立の位置づけをマッピング



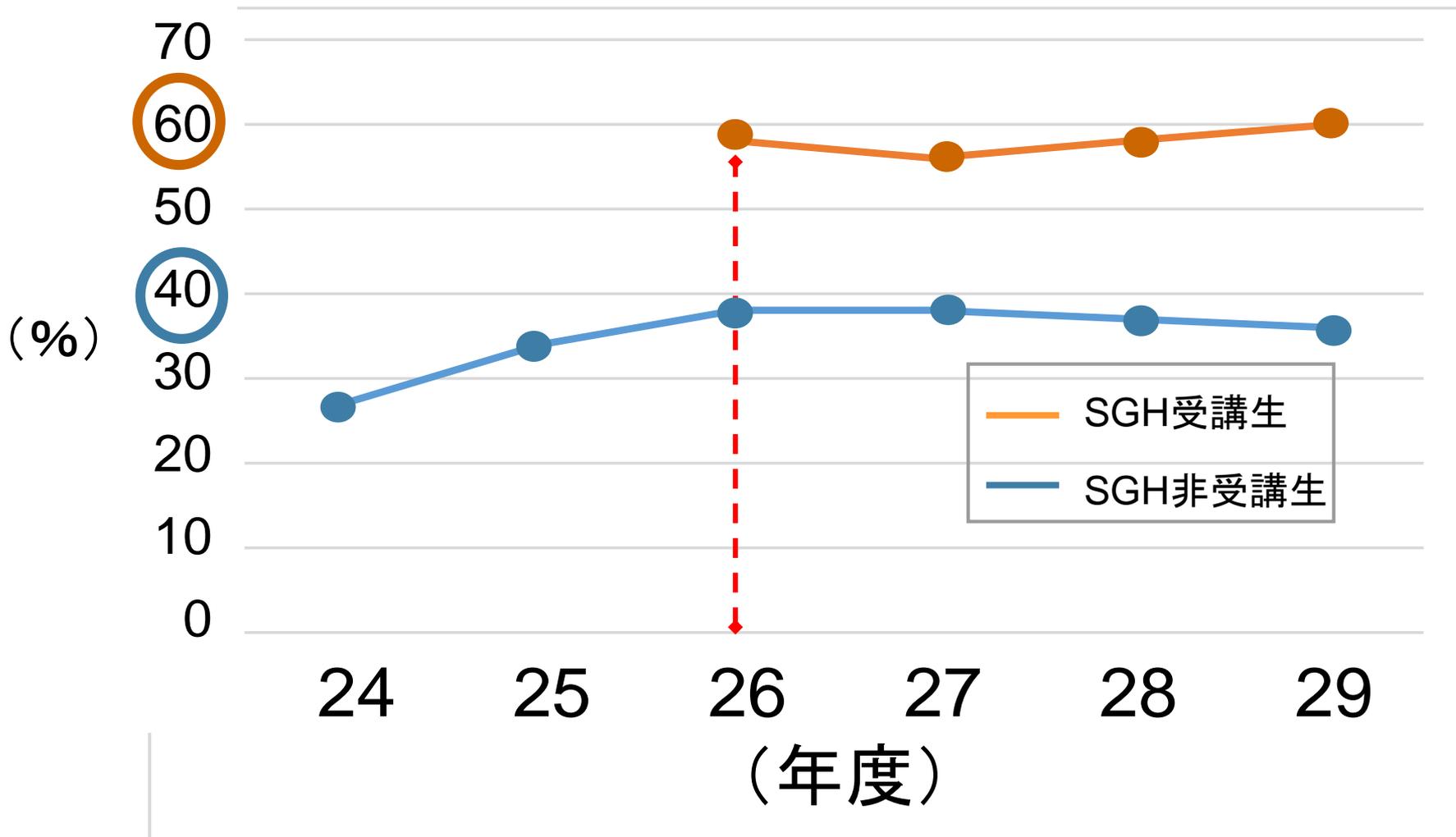
目標設定シート①

CEFR B1～B2の生徒の割合



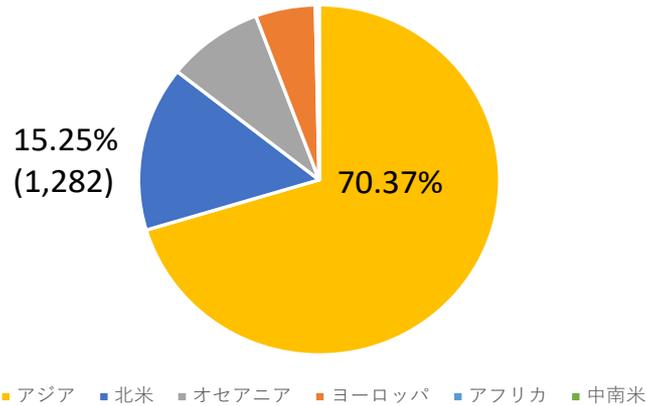
目標設定シート②

留学・国際キャリア志望

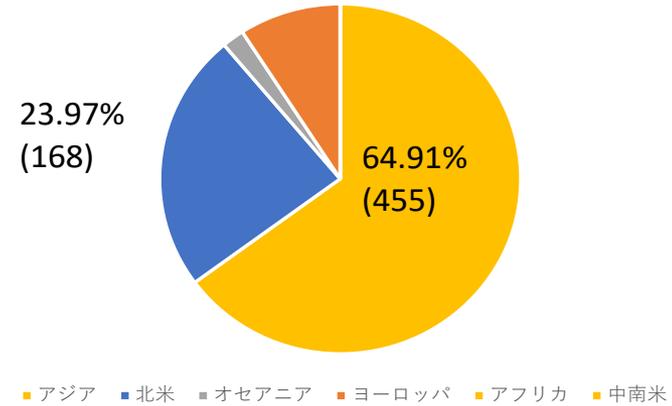


国外研修先と派遣者数

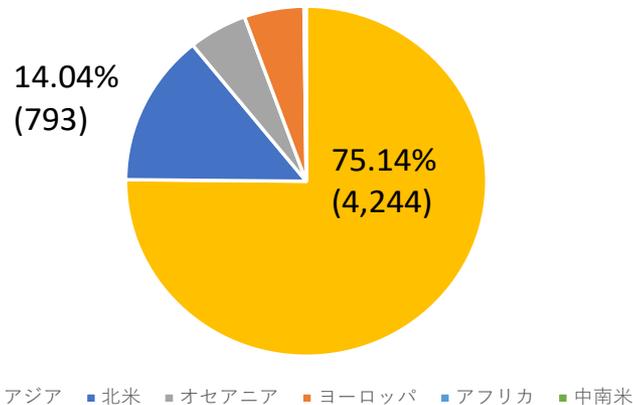
H29 国外研修者数（全体） n=8,406



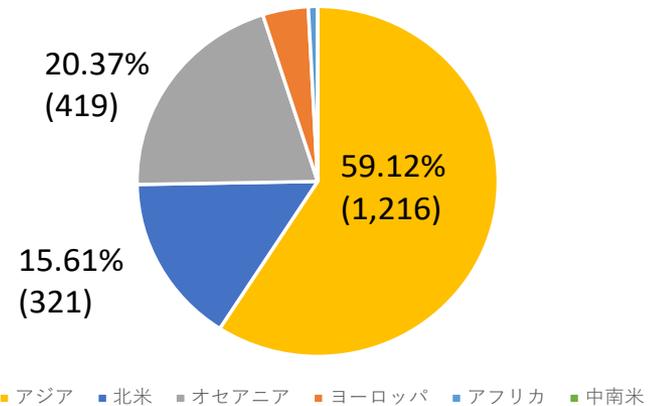
H29 国外研修者数（国立） n=701



H29 国外研修者数（公立） n=5,648



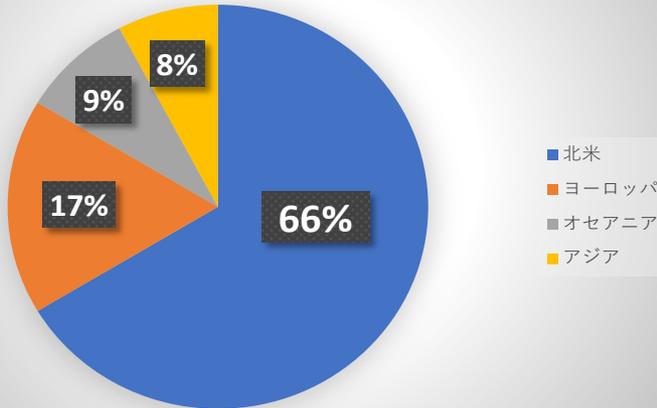
H29 国外研修者数（私立） n=2,057



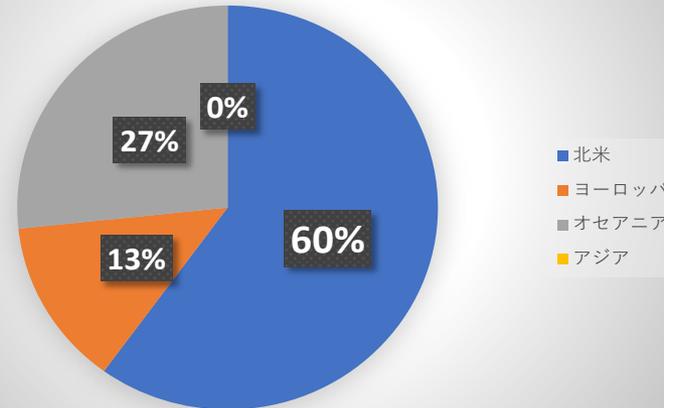
国外研修の中心はアジア・私立は2割が大洋州

海外大学進学者数

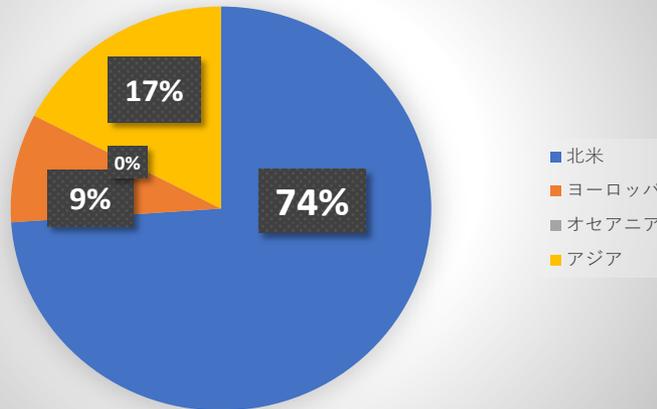
H30海外大学進学（全体） n=116



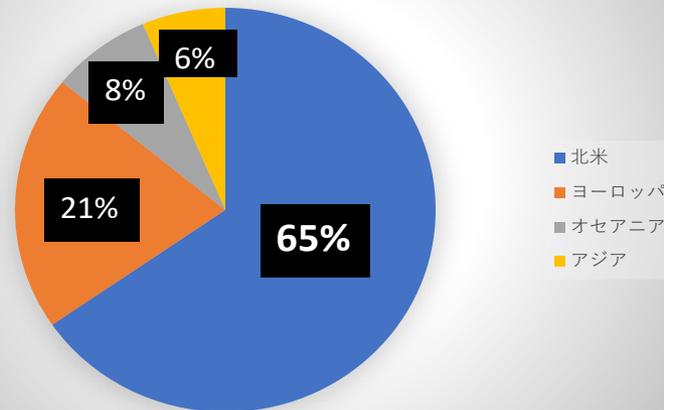
H30海外大学生徒（国立） n=15



H30海外大学進学生徒（公立） n=23



H30海外大学進学生徒（私立） n=78



海外進学先の中心は北米、地域的多様性も

アンケート調査結果 ハイライト

教育課程(=122)

2位と10p以上差
 2位と5p以上差 (%)

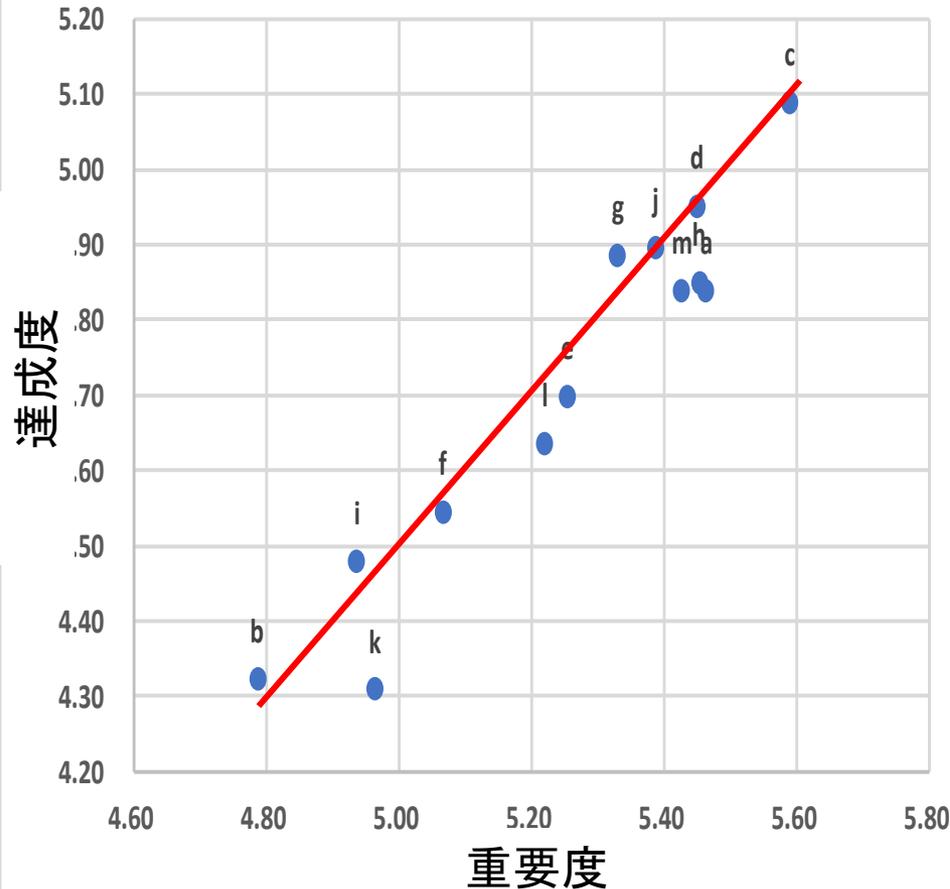
課程に関する質問項目	H26	H27	H28	全体
総合的学習の時間以外教科での探究的学習の充実	85.5	78.6	72.7	81.1
必修科目の標準単位数減	38.2	23.2	9.1	28.7
その他の教育課程の特例の適用	25.5	16.1	9.1	19.7
SGH事業に資する既存の特徴的な教科科目の設定	34.5	41.1	18.2	36.1
総合的な学習の時間の名称の変更	50.9	57.1	36.4	52.5
探究的な学習を行う科目の単位数増	25.5	32.1	36.4	29.5
SGH事業を意識した学校設定教科科目の新設	70.9	64.3	63.6	67.2
横断的な視点での総合的な学習の時間の内容編成	67.3	71.4	63.6	68.9
教科横断的な視点での授業実践	52.7	60.7	54.5	56.6
学校外学修の他に単位認定実施	20.0	19.6	18.2	19.7
SGHに関連する教育課程のコース・類型の新設	21.8	17.9	27.3	20.5
SGH事業を意識した学科の新設	2.2	4.2	0.0	4.1

「先発効果」による既存制度上の変更、「後発効果」による新規導入

教育方法と活動頻度(n=119)

教育方法の内容		H26	H27	H28	全体
英語活用	英語による英語以外の授業	3.65	3.09	2.09	3.25
	外国人教員などによる授業	5.59	5.54	5.09	5.52
	海外研修	2.80	3.06	2.82	2.92
	海外生徒との交流経験	3.44	3.72	3.18	3.55
	英語での課題研究レポート作成	2.72	3.04	2.91	2.88
	英語でのグループワーク	4.81	4.85	3.60	4.72
	英語でのプレゼンテーション	3.70	3.83	3.09	3.70
	英語でのディスカッションないしはディベート	4.44	4.02	3.27	4.14
リテラシー	ロジカルシンキングの方法	5.22	5.09	5.45	5.18
	プレゼンテーションの方法	5.17	5.31	5.64	5.28
	日本語でのグループワーク	5.85	5.93	5.64	5.87
	日本語でのプレゼンテーション	4.25	4.52	3.91	4.34
	日本語でのディスカッションないしはディベート	5.09	5.11	4.09	5.01
研究メソッド	生徒自らによる探究課題設定	3.52	3.75	4.27	3.69
	データの取り方や分析の方法	4.94	5.02	5.36	5.02
	フィールドワーク	3.56	3.67	3.73	3.62
	課題研究レポートのまとめ方	4.78	4.96	5.45	4.92
	生徒自らによる調査データ収集・分析	4.33	4.44	4.36	4.39
	日本語での課題研究レポート作成	3.63	3.89	4.27	3.81

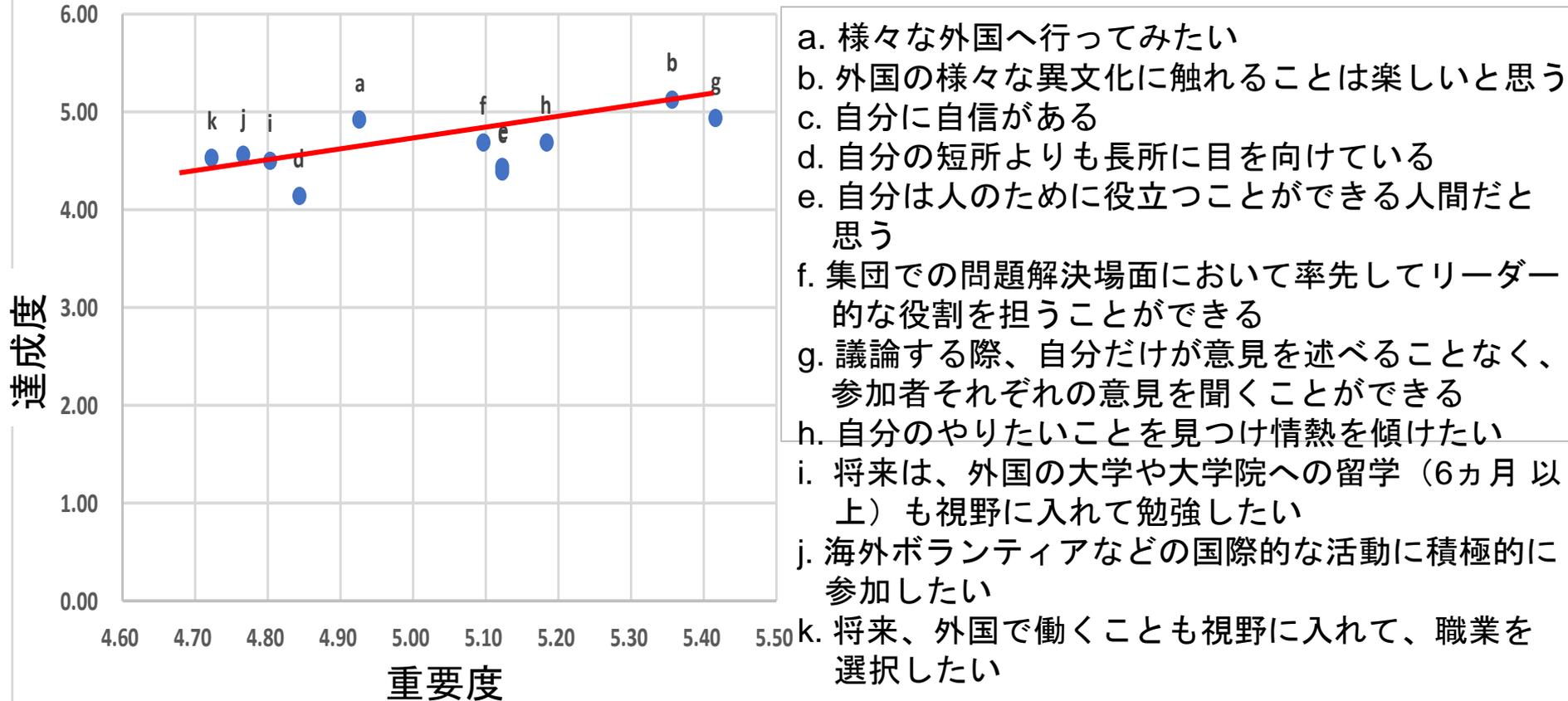
コンピテンシー(行動特性)の重要度と能力向上の関係性



- a. 相手の置かれた立場や気持ちを察する
- b. 必要ならば、最初に決めたことを変える
- c. 自分と異なる立場の人の価値観を尊重する
- d. 複数の視点から問題の原因を考える
- e. 複数の選択肢を考える
- f. 相手が意見を述べやすいように心がける
- g. 相手との協力関係を築くように心がける
- h. 反対意見にも耳を傾ける
- i. 自分の得意な能力を活かす行動をとる
- j. 自分の意見を効果的に述べて相手に説明する
- k. 解決が進んでいるか、途中で確認する
- l. 今回の出来事から、学んだことを振り返る
- m. 解決に向けて強い熱意を持ち続ける

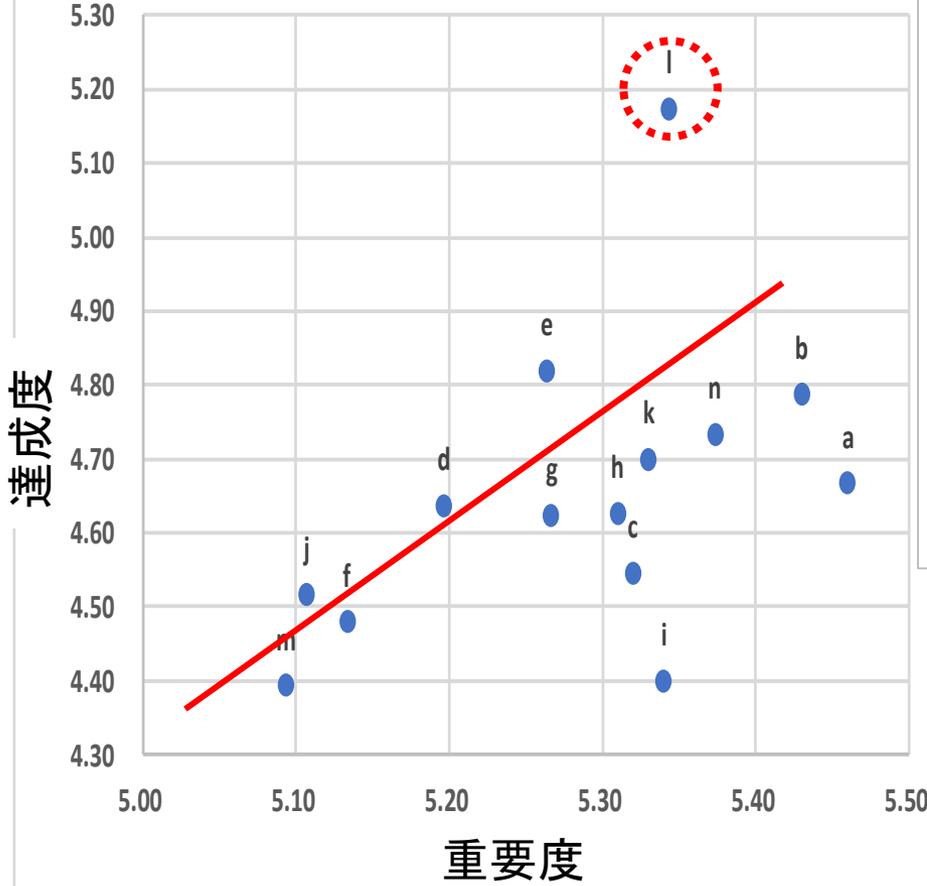
重要度に対応した生徒のコンピテンシー能力が育成されている。

グローバルマインドセット(意識特性)の重要度と能力育成の関係性



多面的なグローバルマインドセットが広範に育成されている。

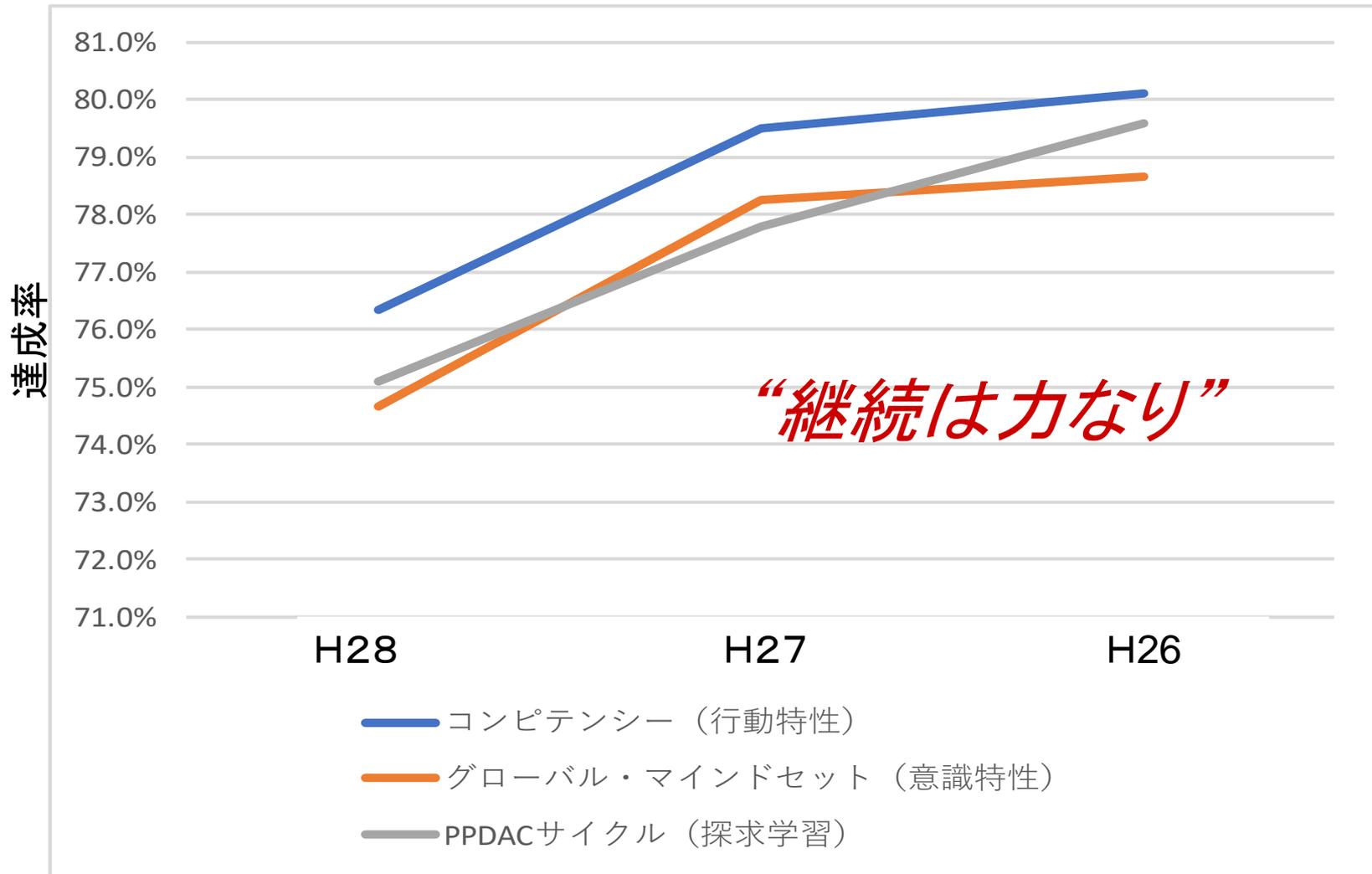
PPDAC(探求学習)の重要度と能力向上の関係性



- a. 基礎学力としての知識を持つ。
- b. 関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり原因を説明することができる
- c. 問題の重要度の根拠を見つけることができる
- d. 生じている問題について、知識や経験を通して説明できる
- e. 問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる
- f. 問題の原因を挙げ重要度をまとめることができる
- g. 問題解決に向けて仮説を立てることができる
- h. 問題解決に合ったデータや情報を選択できる
- i. 集めたデータや情報の正確さがわかる
- j. 作成した図表について、必要に合わせた使い方ができる
- k. 分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる
- l. 提案を適切にプレゼンテーションできる**
- m. 提案した内容がどこまで有効かについて説明できる
- n. 自分の発表に対する質問に適切に回答できる。

重要度に応じて探求学習能力が育成され、とりわけ**”l. 提案を適切にプレゼンテーションできる”**能力の成長がみられる。

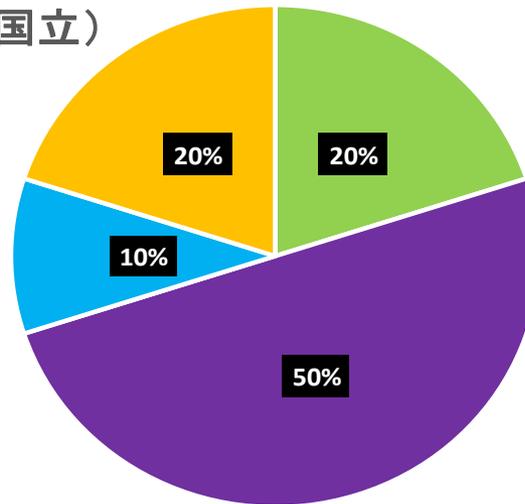
資質・能力の達成度（採択年度間比較）



3種類の資質・能力とも、採択後の経年効果が現れており、**プログラム継続の重要性**が認められる。

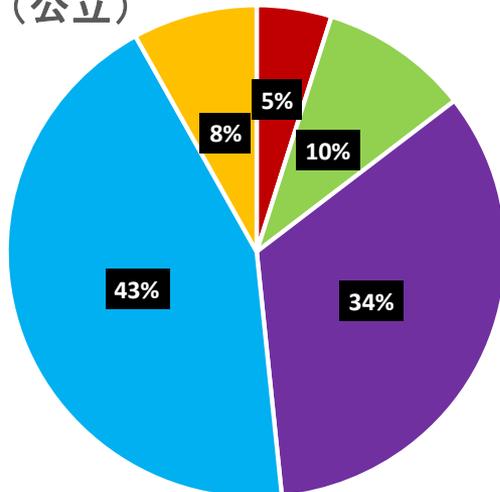
SGH採択後の入学者の質的变化

(国立)

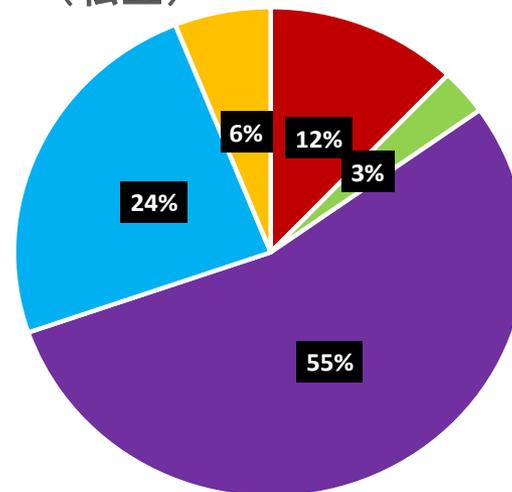


「とても変化した」・「変化した」合計は国立(30%)
公立(51%)、私立(30%)

(公立)

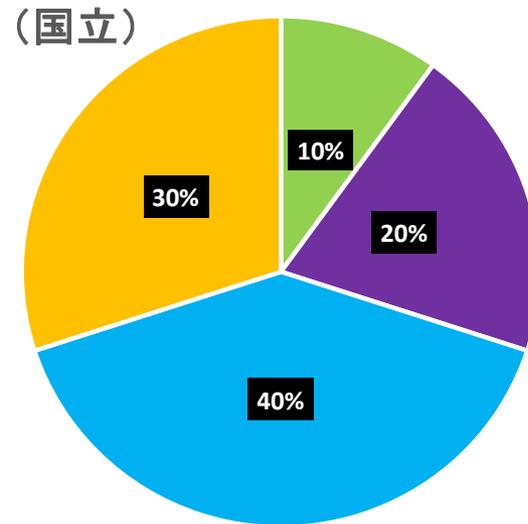


(私立)

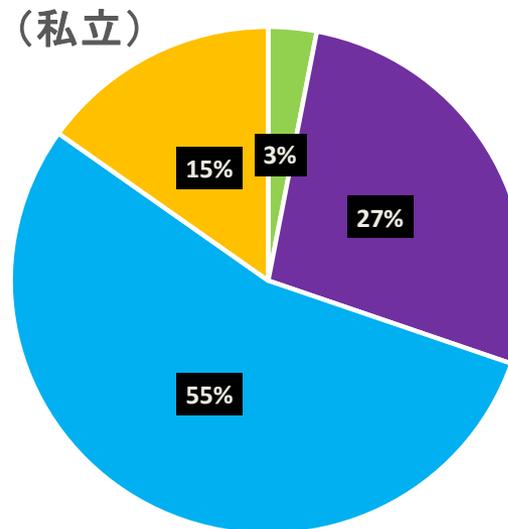
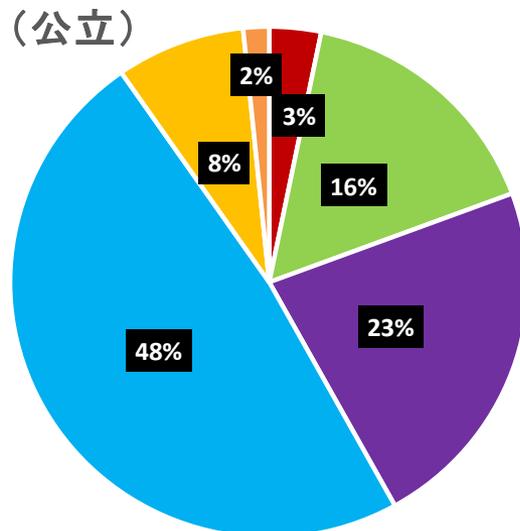


- 2 変化していないと思う
- 3 どちらかと言えば変化していないと思う
- 4 どちらかと言えば変化したと思う
- 5 変化したと思う
- 6 とても変化したと思う

管理機関のSGHプログラム支援への満足度



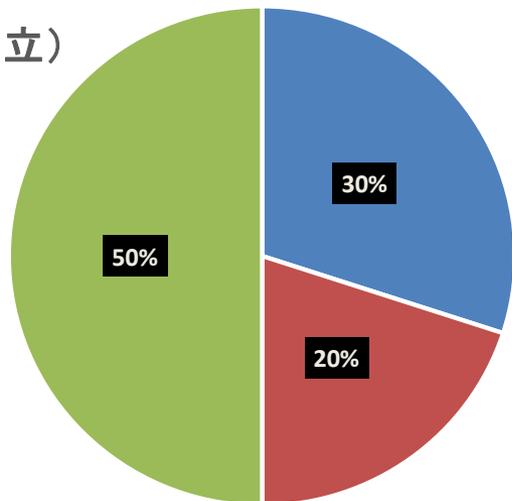
「大変満足」・「満足」の合計は、国立(70%)、公立(56%)、私立(70%)



- 2 不満である
- 3 どちらかと言えば不満である
- 4 どちらかと言えば満足している
- 5 満足している
- 6 大変満足している

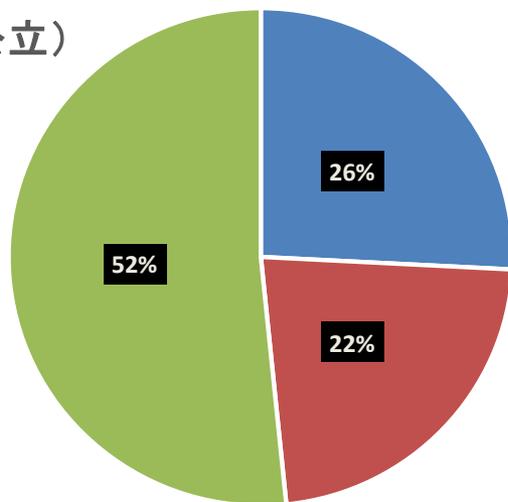
自走によるSGHプログラムの継続可能性

(国立)

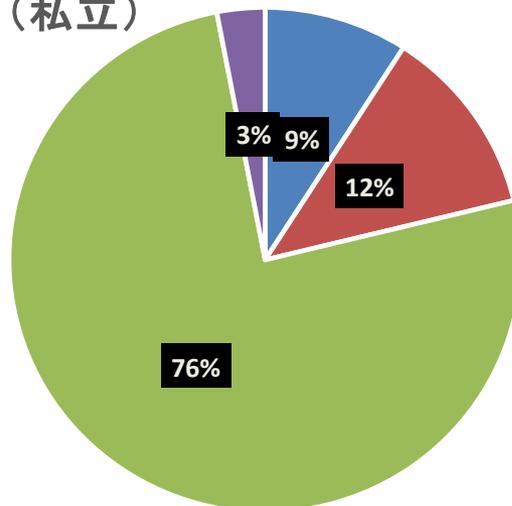


「可能であるが、支援があることが望ましい」は、
国立(50%)、公立(52%)
私立(76%)

(公立)

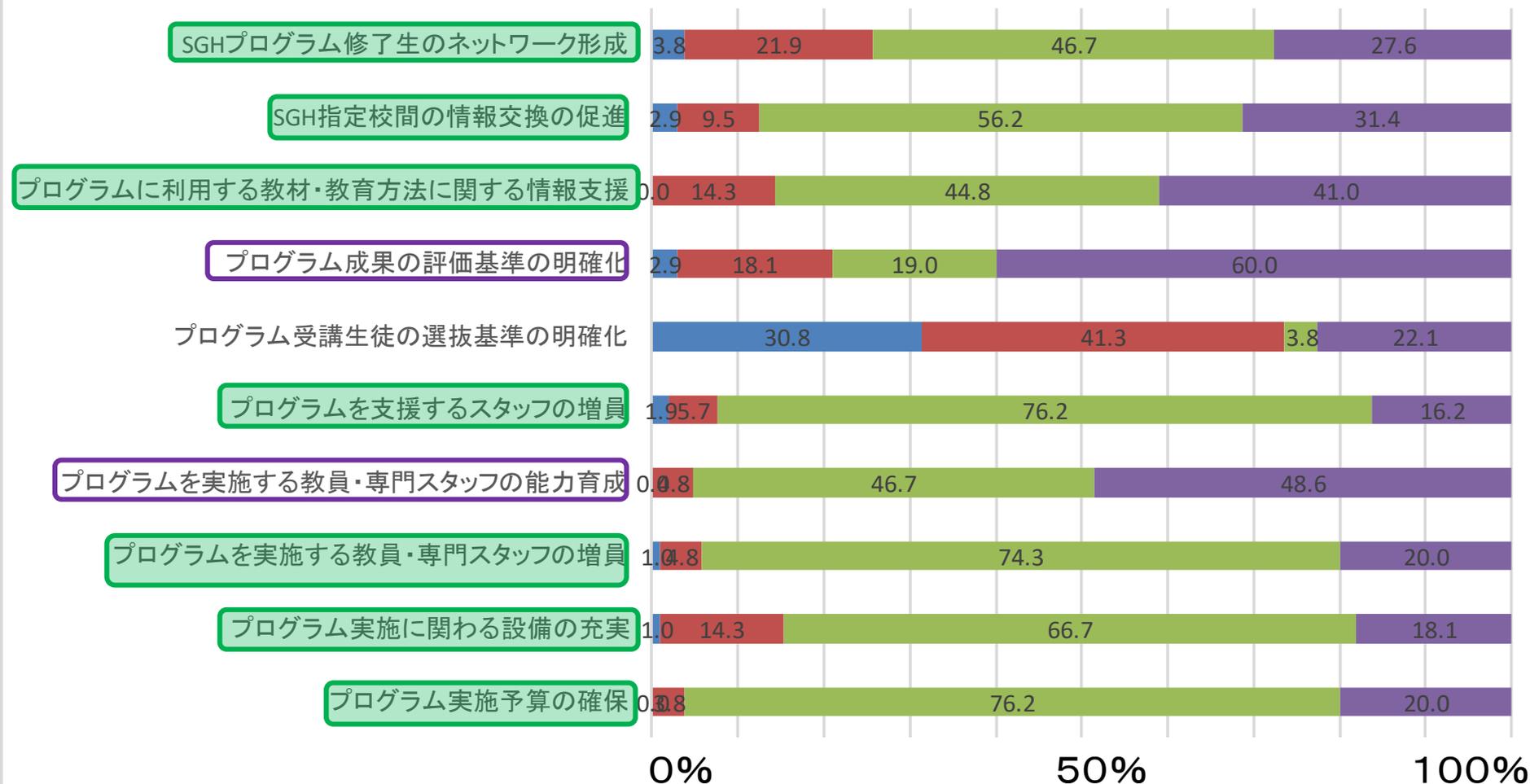


(私立)

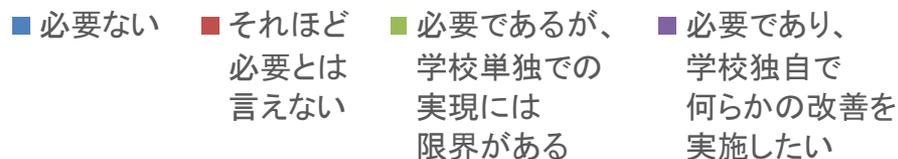


- 1 支援なくして不可能である
- 2 どちらとも言えない
- 3 可能ではあるが、支援があることが望ましい
- 4 完全に可能である

SGHプログラム継続に向けた支援の必要性



インフラ面(情報・スタッフ・設備・予算)に関わる外部支援の必要性



維持すべき点・変更すべき点(提言)

変えてはならない

- ①SGHプログラムの事業成果として能力・資質（英語力・行動特性・意識特性・探求行動）の着実な向上が検証されており、継続性と改善活動の恒常化を図ること。
(PDCAサイクル)
- ②優れたプログラムは、後発効果による他校の教育的イノベーションを創発することが期待されることから、事業成果の普及を積極的に行うこと。
- ③国内外のネットワーク構築には、人的、時間的、経済的コストが掛かることから、構築されたネットワークのメンテナンスを行うこと。

変えなければならない

- ①国立・公立・私立の枠を超えて、それぞれがもつコアコンピタンスやベストプラクティスを共有し、地域コンソーシアム（共同事業体）として活動すること。
- ②卒業生がシームレスにグローバル人材として成長するために、高大連携教育を一層発展、促進させるための働きかけ、将来的には入試制度にも結び付けること。
- ③グローバル人材を教育する教諭を育成するための標準プログラム開発を行い、研修機会と運営支援を提供すること。